

## 暖地向け高子実収量トウモロコシの品種選定

東 政則<sup>3)</sup>・甲斐敬康<sup>1)</sup>・森 徹<sup>3)</sup>・高橋奈津美・立山松男<sup>2)</sup>・小畑 寿<sup>3)</sup>

(宮崎県畜産試験場・<sup>1)</sup> 畜産試験場川南支場・<sup>2)</sup> 中部農林振興局・<sup>3)</sup> 退職)

### 【目的】

近年の濃厚飼料の価格高騰に伴い、濃厚飼料も自給する必要性が高まってきた。そこで濃厚飼料として多く利用されているトウモロコシの穀実を自給することを目的に、本県における適性品種と栽培法を検討し、暖地におけるトウモロコシ子実生産の可能性とその栽培技術の検討を行った。

### 【材料および方法】

品種選定試験においては、条間 75cm×4 列×17cm×24 粒、1 点 1 粒点播とし、5～6 月に各期 8 品種の 2 回播種し 1 元配置 3 反復乱塊法により供試した。除草剤は播種直後に土壌処理剤、5 葉期に茎葉処理剤を散布した。

播種条件試験においては、条間を 60～75cm、株間を 16～21cm に変化させ試験を行った。

また害虫対策試験では、品種には SH2933 を用い、7 月に播種した。各区長さ 40m×条間 75cm×8 列区区画にカルタップ水溶剤を 6 葉期に 1 回散布区、6 葉期+雄穂抽出前散布区、6 葉期+雄穂抽出後散布区の 3 区に分けて試験を行った。散布方法は、ブームスプレーヤーや動力噴霧機により散布を行った。

### 【結果および考察】

#### ○品種選定試験

PI2008、SH2933 は子実収量が多かった。また播種期が早くなると異常穂が増加する傾向にあったが SH2933 は異常穂の割合が低かったことから、穀実用品種として利用できる (図 1)。

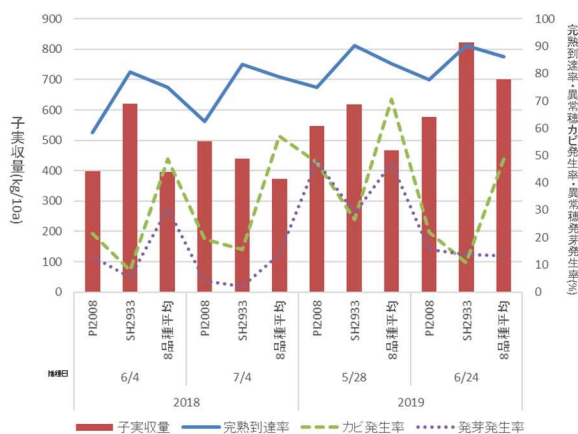


図1 トウモロコシ品種比較試験成績

#### ○栽培法試験

施肥については、サイレージ用トウモロコシの施肥基準程度で十分であった (図 2)。条間等の播種条件については、通常の飼料用トウモロコシの作付けが最も適していた。播種時期については、異常穂防止と完熟達成のため、6月上旬～7月上旬までの播種が望ましいと考えられた。

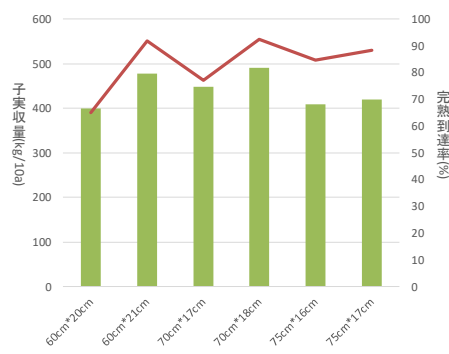


図2 条間及び株間栽培試験  
播種日:7月10日、収穫日:11月5日

#### ○害虫対策試験

最も発生が懸念されたアワノメイガの防除に関しては、6 葉期 1 回散布で十分な効果が得られた。

#### ○栄養分析試験

子実栄養については、粗灰分がやや高い傾向があったが、その他は標準並みの値であった (図 3)。

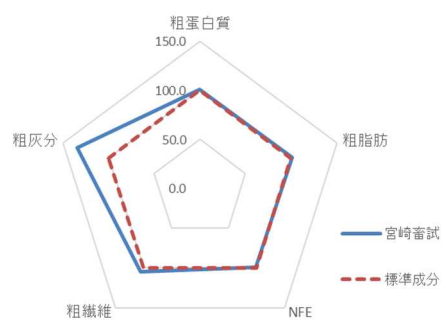


図3 子実用トウモロコシの栄養成分

しかし、収穫時の調査で子実にカビや発芽の異常穂発生が見られたことから、サイレージ調整には注意が必要である (図 1)。

以上のことから、飼料用のトウモロコシを穀実収穫目的に栽培する場合、播種適期は 6～7 月上旬であり、利用可能な品種は限定されるが、暖地でもトウモロコシ完熟子実生産が可能である。